

### 琉球の美術工芸品

#### 1 はじめに

沖縄本島を中心に奄美群島から先島諸島までの広範囲な領域は、15世紀初めから19世紀末まで琉球王国の支配下にあった。琉球王国は中国（明及び清）の冊封（中国王朝が周辺国を支配する外交政策）下に組み込まれていたが、1609年に日本の薩摩藩の侵攻以後は、薩摩藩と清への両属という体制を取りながらも独立した王国として存在し、日本、中国、朝鮮、さらには南方諸国の国々と交易を行って独自の文化圏を形成していた。海外の多彩な品々や技術がもたらされ、日本国内ではほとんど類するものがない美術品、工芸品が数多く作られた<sup>1)2)</sup>。1871年の廃藩置県により琉球が鹿児島県の管轄下に置かれても、これらの文化財の多くは大切に護り伝えられてきたが、20世紀の太平洋戦争末期の沖縄戦によって壊滅的な打撃を受け、多くの文化財資料が焼失・散逸することとなった。

以下に、最近の分析化学調査によって明らかになった琉球の美術工芸品の材料的な特徴を紹介する。

#### 2 絵画資料

琉球王国には絵師集団が存在した記録が残るが、1609年の薩摩藩侵攻以前に描かれた絵画で現存する資料はない。確認できる最古の絵師は自了と号した欽可聖（唐名、和名は城間清豊、1614-1644）である。これ以降、琉球王国で描かれた絵画に使われている白色顔料は、鉛白（ $\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$ ）だけであることが最近の調査で明らかになった<sup>3)</sup>。

日本国内で描かれた絵画に使われている白色顔料は、高松塚・キトラ古墳壁画が描かれた飛鳥時代以降、室町時代中期（15世紀中頃）に至るまでは鉛白が主として使われている。しかし、室町時代後期（16世紀）以降は胡粉（ $\text{CaCO}_3$ ）がもっぱら用いられ、鉛白が使われている絵画はほとんど存在しない。日本国内では鉛白が使われなくなった時代に、琉球王国では依然として鉛白が使われ続けているという事実は、政治的な繋がりや文化的な繋がり<sup>4)</sup>の乖離を意味するものとして興味深い。

#### 3 漆芸資料

琉球王国で作られた漆芸品は「琉球漆器」とも呼ばれ、琉球の美術工芸品を代表するものの一つである。琉球王国では貝摺奉行所と呼ばれる漆芸品製作所が設置され、漆芸品の製作が盛んに行われていた。当初は、将軍家へ

の献上品、諸大名への贈答品として製作が行われていたが、次第に貴族階級の生活の中に取り入れられ、宮廷舞踊や冊封使のための什器としても使われるようになる。その製作技法は「螺鈿」「沈金」「箔絵」「堆錦」など様々であり、これらの技術は現在まで継承されている。これらの製作技法は琉球だけに限定されたものではないが、琉球王国で製作された漆芸品には他では見られない材料的な特徴がある。

すなわち、「沈金」は漆塗膜に細い彫線の文様を施し、そこに金箔等を摺り込む技法、「箔絵」は漆で文様を描いた上に金銀箔を貼り付ける技法であるが、いずれにおいても金箔の下層にAsを主成分とする石黄と呼ばれる黄色顔料を塗る特徴がある<sup>4)</sup>。さらに、「堆錦」という技法は顔料と漆を固く練り合わせ餅状にしたものを模様<sup>5)</sup>に切り抜いて器物に張りつけ、その上に彩色を施す技法であるが、ここでも石黄を利用している作品が多数存在している。日本国内で製作された漆芸品に石黄を用いている例はほとんどなく、琉球漆器にのみ見られる特徴の一つである。

#### 4 陶芸資料

琉球で独自に陶芸品が製作されるようになるのは16世紀後半からと考えられているが、1609年の薩摩藩侵攻以降、琉球王国には陶工集団が存在し、さまざまな陶芸品が製作された。その中に、呉須と呼ばれる青色顔料によって着色や文様が施されたものがある。この青色顔料を分析してみると、多くの作品でスマルトという顔料が使われていることが明らかになった。

一般に、呉須は酸化コバルトを主成分とする天然の粘土、呉須土（asbolite）を原料とするもので、中国では元代の景德鎮窯などで盛んに用いられている。一方、スマルトは砒化コバルトを主成分とする砒コバルト鉱またはスマルト鉱（smaltite,  $(\text{Co}, \text{Ni})\text{As}_{3-x}$ ）を原料とするもので、CoとともにAsを大量に含むことが特徴である。これまで、中国あるいは日本の陶磁器の分析においてスマルトあるいはその組成に近い鉱物（コバルト華）を検出したとする報告はあるが、琉球の陶芸資料にスマルトが使われていることが確認されたのは、近年の研究によるものである<sup>5)</sup>。

#### 5 ガラス資料

琉球の美術工芸品の中にはガラス小玉を多用した資料がいくつかある。最も有名な資料は国宝に指定されている玉御冠（図1）であるが、それ以外にも金属製の瓶



図1 国宝 玉御冠（那覇市歴史博物館所蔵）<sup>2)</sup>

の表面にガラス小玉の編み物を被せた御玉貫などがよく知られている。しかし、琉球王国時代の遺跡からガラス工房跡は見つかっておらず、これらのガラスがどこで作られ、どのようなルートで琉球にもたらされたのかはこれまで謎であった。近年、ガラスの材料分析がいくつか行われ、琉球王国ではカリウム鉛ガラスが多く使われていることが確認され、さらに鉛同位体比分析によって産地推定が行われた。その結果、鉛の供給産地としては中国華南からのものが大半を占めるが、日本、朝鮮半島、中国華北、さらにはタイなどからも供給されている可能性が示唆され、琉球王国の交易の広さを物語る分析結果として注目されている<sup>6)</sup>。

## 6 金工資料

琉球王国では、その初期のころから金属の鑄造・加工を行っており、大きなものでは高さ1m超の梵鐘から、小さなものでは簪や酒器、武具飾など数多くの金工品が製作された<sup>7)</sup>。1458年に当時の琉球王国の国王・尚泰久の命によって作られた「万国津梁の鐘」は高さ154.9cm、重さ721kgと巨大なもので、製作後は首里城正殿前に掛けられていた。九州の豊前や筑前、さらには京都からも工人を呼び寄せて琉球王国内で製造されたもので、その材料や技法は日本国内で作られた梵鐘と同様、青銅（Cu-Sn合金）を鑄型に流し込んで鑄造

したものである。

一方、祭祀用の酒器では金杯（Au 80-90%程度）、銀杯（Ag 90-95%程度）が作られ、さらに銅あるいは青銅地金にアマルガム鍍金（Au-Hg合金による金メッキ）を施した簪なども見られる。上述した御玉貫の瓶にはSn-Pb合金が使われている。金工に関する多様な材料と技術を有していたことがわかる。

## 7 おわりに

2019年10月31日、首里城が火災によって焼失した。琉球王国文化の象徴とされていたのが首里城である。琉球王国時代から継承されてきた首里城は1945年の沖縄戦によって全焼しており、今回の火災によって焼失した首里城は1992年に復元されたものである。今回焼失した首里城の建物の中には琉球王国時代から伝世され（いくつかは復元され）てきた美術工芸品約1500点が保存・展示されており、今回の火災でそのうちの約400点が焼失した。約1100点は耐火性の収蔵庫内に保管されていたため焼失を免れたものの、熱や煤によって大きな損傷を受けてしまったものも少なくない。既に修復処置が始まっているが、全資料の修復を終えるには10~20年以上を要すると考えられている。今後、琉球王国文化の遺産が末永く受け継がれていくことを切に願う次第である。

## 文 献

- 1) 鎌倉芳太郎：“沖縄文化の遺宝”，p. 420（1982），（岩波書店）。
- 2) 那覇市歴史博物館編：“国宝「琉球国王尚家関係資料」のすべて 尚家資料/目録・解説”，p. 334（2006），（沖縄タイムス社）。
- 3) 東京文化財研究所：“琉球絵画 光学調査報告書”，p. 255（2017）。
- 4) 浦添市美術館：“館蔵 琉球漆芸”，p. 235（1995）。
- 5) 早川泰弘，園原 謙，外間一先，上江洲安亨：沖縄県立博物館・美術館紀要，**10**，65（2017）。
- 6) 沖縄県教育委員会：“沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書”，p. 191（2011）。
- 7) 久保智康：“琉球の金工 日本の美術533”，p. 96（2010），（至文堂）。

〔東京文化財研究所 早川泰弘〕